

第2回吉良サミットで全国に発信

# 忠臣蔵という物語と史実の違い



ぶらわかんじょうがみ

「武江観場面譜」

幕末に江戸の浅草奥山で興行された生人形興行の「忠臣蔵夜討」のシーンを描いた錦絵。生人形とは精密な細工を施した人形や背景などで歴史や物語の場面などを再現する見世物のことをいいます。

江戸城の刃傷事件や吉良邸討ち入りなどの元禄赤穂事件は「忠臣蔵」という創作物語で全国に知れ渡っていますが、史実とはまったく異なるものです。地元では名君として慕われながらも、忠臣蔵では悪役として描かれた吉良上野介義央公の名譽を回復しようとする昨年12月13日に「第2回吉良サミット」が文化会館で開催されました。サミットには約1200人が来場し、忠臣蔵という物語と歴史的史実の違いが全国に発信されました。今号では、サミットでの講演や鼎談などの様子をダイジェストでお伝えします。

問合先 秘書課秘書担当（☎65・2171）

## プロローグ（講演）

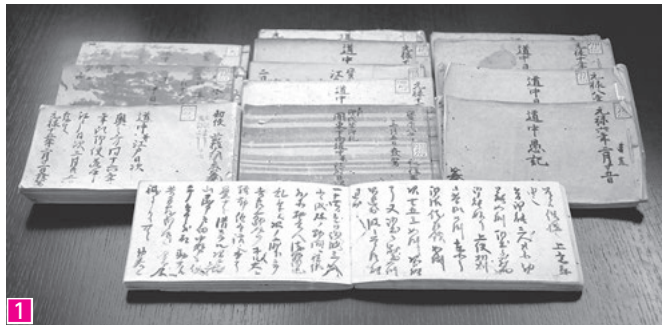
案内役 岩瀬文庫学芸員 林知左子

### 元禄赤穂事件のあらまし

事の発端は元禄14（1701）年3月14日、年賀答礼の勅使に将軍が対面するという重要な儀式を控えた江戸城の大廊下で、勅使饗応役の赤穂藩主・浅野内匠頭長矩が、幕府の典礼を取り仕切る高家筆頭の吉良上野介義央を背後から斬りつけるという刃傷沙汰を起こしたことでした。浅野が刃傷に及んだ理由は今もって不明なままです。ゆえに事件直後からさまざまな憶測を呼び、また芝居や創作などで

語られるまことしやかな理由が世間を賑わせています。浅野は取り押さえられ、一関藩主・田村建顕邸にて即日切腹、赤穂藩浅野家も取りつぶしとなりました。一方、吉良はこの件で幕府から落ち度を問われることはありませんでしたが、自ら高家の職を退きました。これを吉良だけひいきされた片落ちの裁定だという向きがありますが、この時だけでなく、江戸時代を通じて発生した殿中での刃傷事件7件全てにおいて、いずれも加害者は切腹、被害者は何のともありません。江戸

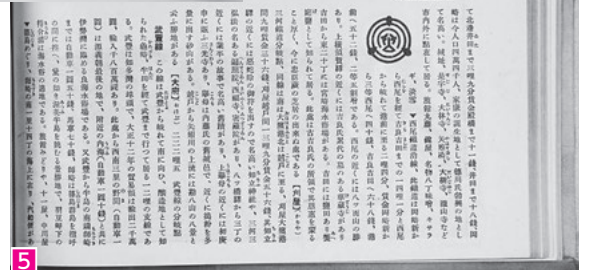
城内で抜刀するということが体のご法度、大罪だからです。浅野の切腹から1年半後の元禄15（1702）年12月14日（15日未明）、本所松坂町（現墨田区両国）の吉良邸を（現墨田区両国）の吉良邸を浅野の家老・大石内蔵助ら47人が武装して夜襲し、義央はじめ17人を殺害、28人に重傷を負わせました。討ち入りを亡君のための義拳と賞賛し助命を求める意見と、筋違いの相手を徒党を組んで殺傷した暴徒として処罰すべきとする意見が対立し、裁定に苦慮した幕府は明けて元禄16（1703）年2月4日、赤穂浪士に切腹の裁定を下す傍ら、同日11日、嗣子の吉良義周（上



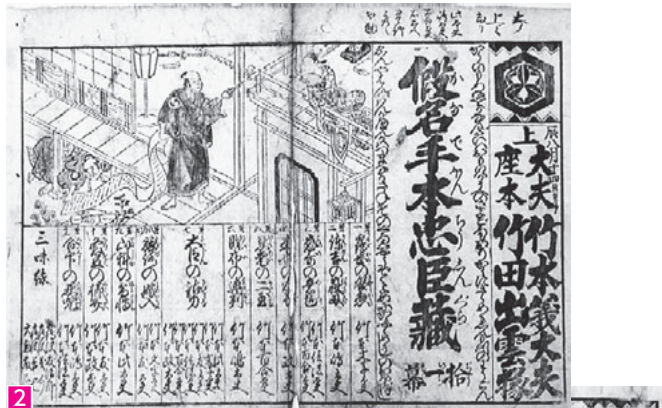
1



4



5



2



3

**1 関東下向道中記** 刃傷事件発生時、江戸城に居合わせた勅使・柳原資廉の記した日記。当日の記述に「馳走人浅野内匠、乱気か。次の廊下にて吉良上野介を切る。大いに騒動、言語に絶するなり」と、当事者ならではの率直な感想が記されています。

**2 3 「仮名手本忠臣蔵」初演番付** 貴重な「仮名手本忠臣蔵」初演時の番付（上演パンフレット）。上の写真の右肩欄外に「大の上々当り」との書き込みがあり、当時の観客たちに大変好評であったことがうかがわれます。

**4 5 鉄道旅行案内** 大正13年、鉄道省刊行。全国の鉄道網と遊覧情報が手際よくまとめられた観光ガイド。当地を紹介する記述の中にこんな一文があります。「この所は古(いにしえ)吉良氏の所領で、その恩を蒙(こうむ)ること厚く、今に忠臣蔵の芝居の出来ぬ所である」

※ 2・3 ページの史料はいずれも岩瀬文庫所蔵

杉家からの養子)を、父を討たれた落ち度との罪で諏訪へ幽閉します。3年後、義周は20歳の若さで病没、ここに足利將軍家の血を引く名門吉良家は断絶しました。

以上が、史実としての事件のあらましです。これらの事件を総称して「元禄赤穂事件」といいます。

### 「仮名手本忠臣蔵」の成立

討ち入りの直後から、事件を題材にした芝居や物語はいくつか作られてきましたが、刃傷事件からくしくも47年目の寛延元(1748)年、大坂竹本座で上演された人形浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』によって決定づけられました。時を室町時代、舞台を鎌倉にと設定を『太平記』の世界に仮託してはありますが、人々はすぐに「元禄赤穂事件」が元ネタだと気づいたことで、虚実を入り混ぜ、大胆な脚色を加えた波乱万丈の筋立てが大衆に人気を博し、翌年には歌舞伎版も上演されて大ブームとなりました。以降、一連の元禄赤穂事件ものの芝居や

文芸作品に「忠臣蔵」の呼び名が定着し、事件は歴史上の事実よりも、この物語をもって、人々に記憶されるようになっていきます。

赤穂義士が理想的なヒーローとしてではなく、やられていく陰で、吉良上野介、義周、被害者に向けられるにはあまりにも冷やかな視線を一身に浴び続けることになったのでした。しかし所領の当地では、善政をしいた名君として遺徳が伝えられ、その敬慕の念は300年余の時を経た今も受け継がれています。

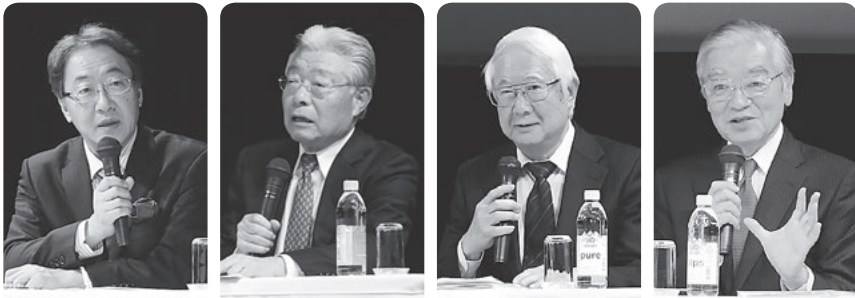
### ひとくちコラム | 塩をめぐる争い？

刃傷の理由の一つとして、昔から根強い「塩をめぐる対立説」。赤穂の製塩は有名ですが、吉良の沿岸部でも饗庭塩という良質な塩がとれたため、そのシェアを巡って争った、上野介が浅野に製塩技術を聞いたのに断られたため報復として嫌がらせをしたなどというものです。しかし、吉良家の所領内には塩田はなく(塩田はもっと沿岸部にあった)、この説は成立しません。

# 鼎談 (3人の座談)

第1部では「元禄赤穂事件を問い直す」をテーマに鼎談が行われました。

登壇したのは徳川宗家18代当主の徳川恒孝氏、上杉家17代当主の上杉邦憲氏、榊原康正市長の3人。東京大学史料編纂所教授の山本博文氏の司会で進められ、活発な意見が交わされました。



山本博文氏

榊原康正市長

上杉邦憲氏

徳川恒孝氏

浅野内匠頭の行動について徳川氏は「内匠頭は経験が少なく、精神的にも若かったのではないか。周りに付いている人が、抑えられなかったことが残念」、上杉氏は「四十七士も原因がよく分からずに討ち入りしたのでは。やりきれない思いがある。幕府は闇討ちを半ば容認していたのではないか」、榊原市長は「義央公に落ち度はなかった。内匠頭が若かったということだと思う。義央公が内匠頭を討とうとしたのではなく、その逆。しかも内匠頭を死なせたのは幕府。義央公を仇として討つのは間違いだと思う」と述べました。

赤穂浪士の切腹と吉良家の取りつぶしという幕府の裁定について徳川氏は「当時はどうしようか幕府内でも意見が分かれ、議論があったと思われる」、上杉氏は「どうしても納得がいかないのは、義周公に対する処遇。義央公を守って戦い、傷を負ったが、諏訪へ幽閉、重罪人として扱われ、20歳で亡くなられた」、榊原市長は「義周公は義央公のため



に傷だらけで戦い、諏訪へお預けとなった。罪人のまま亡くなられたことが非常に気の毒」と述べました。

また、上杉氏からは「上杉家の三姫が見初めて嫁ぐほど、義央公はハンサムであったのではないか」などの話もあり、会場を和ませていました。

最後に山本氏は「当時の複雑な状況は理解しにくく、分かりにくい部分もある。日本人らしい自己犠牲の精神の下、主君のあだ討ちとして描かれたことで人気のある忠臣蔵において、ことさらに悪者に仕立てられる吉良上野介の姿は史実ではない。物語と史実を切り離して、赤穂事件を深く考えていくことが大切である」とまとめ、鼎談を締めくくりました。

## パネルディスカッション

第2部は「歴史輝くわがまち～過去、現在、そして未来へ～」をテーマにしたパネルディスカッション。

上杉家の三姫(富子)が嫁ぐなどした三重の縁で結ばれ関わりの深い山形県米沢市、浅野内匠頭が切腹した場所が一関藩主田村家の江戸藩邸であった岩手県一関市、討ち入り場所となった吉良邸のあった東京都墨田区、吉良家最後の当主・義周終息の地長野県諏訪市、西尾市の元禄赤穂事件ゆかりの5自治体が参加しました。



米沢市の安部市長は吉良公だけでなく、上杉鷹山らを通してさまざまな地域と交流を深め、今後もまちづくりを行うことを紹介。一関市の長田副市長は農村景観の保全に努め、世界最先端技術の誘致と併せた文化の融合を進めている現状を披露。墨田区の金子課長はスカイツリーや両国国技館だけでなく、吉良家ゆかりの観光資源を活用して今後もPRしていくことを説明。諏訪市の高見次長はまちの歴史、宝である諏訪大社などの歴史的ランドマークのもと、周辺市と協力し観光に取り組んでいくことを挙げました。榊原西尾市長は海や山などの自然環境だけでなく、歴史や文化などの多くの観光資源を活用して、西尾を全国に発信していきたいと結びました。

左から米沢市の安部三十郎市長、一関市の長田仁副市長、墨田区の金子明観光課長、諏訪市の高見俊樹教育次長、榊原康正市長

## アトラクション

開会のアトラクションとして「吉良さん学習発表」が行われ、吉良町内5小学校の児童が吉良さんについて学んだことを元気よく発表しました。

吉田小学校は、鎌倉時代に足利家第3代当主・義氏の長男・長氏が吉良の土地を治めてから吉良を名乗るようになったことなど「吉良家のルーツ」を発表しました。

津平小学校は、吉良氏が江戸幕府において高家という役職に就き「吉良流礼法」を大名に指導していたことなどを発表しました。

横須賀小学校は、洪水による農作物への被害に悩む領民のために堤を築いたおかげで、黄金色の米がたくさん実ったことから「黄金堤」と呼ばれるようになったことを発表しました。

荻原小学校は、吉良さんは農耕馬である「赤馬」に乗って領地を見回りながら、領民一人一人にねぎらいの言葉を掛けるなど慕われる殿様であったことを発表、来場者と一緒に考える赤馬クイズも出しました。

白浜小学校は、富子夫人の墓がある「真正寺」や、吉良さんの富子夫人にちなんで名付けられた「富好新田」という地名について発表しました。



吉田小学校



津平小学校



横須賀小学校



荻原小学校



白浜小学校



義央公の血を引く上杉家、そして、三河松平氏時代から吉良氏と縁を結ぶ徳川家が臨席した鼎談において、史実は「物語」とは切り離して考えるべきであると改めて認識されました。

歴史上の事実よりも「物語」によって、人々に記憶されてしまった吉良上野介義央公。

## エピソード

また、吉良町内の小学校児童によって吉良さんの遺徳が紹介されるなど、さまざまな「思い」が語られる吉良サミットとなりました。

これらの「思い」は、吉良さんで結ばれた山形県米沢市をはじめ参加した自治体などを通して、全国的な広がりをみせていくことでしょう。

吉良サミットの翌日、吉良氏の菩提寺である華蔵寺（吉良町）で義央公毎歳忌が行われました。境内には義央公の遺徳をしのぶ人々が全国から集まります。

そして、上杉邦憲氏と徳川恒孝氏が墓前に並び立ち、じっと手を合わせる姿に、御影堂の義央公の木像もほほ笑んでいるようでした。

